

Caldecott 賞受賞作品に見られる色彩イメージ

—— 「外書講読」授業目標③より ——

Color Images Found in Caldecott Award Winners

中西のりこ¹⁾ 新田 紗也²⁾ 中川 勇生²⁾

Noriko NAKANISHI, Saya NITTA, Yusei NAKAGAWA

(要約)

本稿では、「文献の整理ができるようになること」を目標の一つとした「外書講読」の受講生が、実習を通して身につけた文献整理とデータ分析のスキルを利用して行った色彩に関する研究内容を紹介する。第2章では新田紗也が夜空の色についての固定概念と作品中で描写される夜空の色合いを検証し、第3章では中川勇生が「色の明暗」が人に与えるイメージについて論じる。このように自発的に研究テーマを見つけ分析を進めた受講生が生まれたことは、「与えられた英文を読み正しく解釈する」という授業スタイルではなく「自分が知りたい情報を得るために読む」という方針で実践した授業の成果であるといえる。

キーワード：文献整理，児童書分析，色相，明度，カラーイメージ

¹⁾ 神戸学院大学経営学部准教授

²⁾ 神戸学院大学経営学部2年次生

1 はじめに

本稿責任筆者担当の「外書講読」では、1) 図書館の使い方に慣れること、2) たくさんのお書物を読むことに慣れること、3) 文献の整理ができるようになることを目標に、本学有瀬図書館に所蔵されている児童向け洋書を利用した活動を行っている(注1)。本稿では上記のうち3) 文献の整理ができるようになること、という目標を意識した授業活動に焦点を当てる。

1-1 授業の目標と活動内容

「講読」という文言を含む科目でありながら文献整理を授業目標の一つとしたことには「英語学習のために与えられた文献を読み、正しい英文解釈の訓練をする」という授業スタイルではなく「個々の学生が見つけた研究課題を追究するために、自発的に選んだ複数の文献を整理し、利用する」という授業スタイルを目指したということが背景となっている。つまり、言語学習のためだけではなく情報を得るために文献を読むという読書の基本を、洋書においても実践することを試みた。また、大学生活の中で課されるレポート課題や卒業論文執筆のために今後学生達は多くの文献に触れることになると考えられるが、読んだものをそのまま鵜呑みにして引用するだけでは不十分である。英文であれ和文であれ、自分なりの切り口で書物と向かい合う姿勢を養う必要があると考えた。

そこで2013年度「外書講読」では、上記3)の文献整理スキルを養うため、書誌情報の入力法についての実習を行った。経営学部生の興味や必要性に合わせて経営学関連の洋書を読み、整理する実習となれば申し分ないが、受講生が現状持っている英語力では複数の専門書を横断的に読むレベルに達していない上に、担当教員の専門分野が英語教育であり経営学の知識に乏しいため、分析対象とする書物としては、経営学の専門書ではなく、児童向け洋書を利用した。そして、「企業イメージ」や「商品パッケージのデザイン」などの分野に 응용が可能となるよう、読んだ作品から抜き出し整理する項目の中に「色彩情報」を含めた。こうして、受講生は各自読んだ作品の基本的な書誌情報と場面ごとの色合いやストーリーに関するキーワードをエクセルファイルに入力し、例えば「赤色」がメインに使われているページではどのようなストーリー展開になっているか、というような分析をする方法を身につけた。

1-2 文献整理のための書誌データベース

図1は「外書講読I」において29人の受講生が文献整理をするために入力した、122作品(135,245語)の書誌データベースの一部である。左から順に、「A列:データ入力をした授業回、B-C列:初めに書誌情報を入力した学生とそれをチェックした学生の番号・氏名(注2)、D列:出版者名、E-F列:著者名(作者と挿絵画家)、G列:本のタイトル、H列:該当ページ番号、I列:本文」のように、受講生全員が共通のフォーマットを使用し書誌情報を入力した。さらに、「J列:各ページを開いたときに最初に目に入った色を赤・青・黄・黒・白・緑・茶から選ぶ、K列:その色の彩度を濃・淡から選ぶ、L列:その色の明度を明・暗から選ぶ」というように、色相とトーンに関するページ情報と、「M-N列:

各ページを開いたときに最初に目に入ったもの」というキーワードを追加し、データベースを作成した。なお、他の作品と比べて極端に語数が多い *Bill Peet: An Autobiography*, Boston: Houghton Mifflin, 1989 (17,412語) と *The invention of Hugo Cabret: a novel in words and pictures*, NY: Scholastic, 2007 (25,010語) の2冊については、受講生の入力負担を軽減するため担当教員が本文をスキヤニングし書誌データファイルに入力した。

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
1	回		出版: 著者(著者)本のタイトル				ページ 本文		赤	濃	明	キーワード	キーワード
2	1A		(Schv Chris Chris A Ball for	↓			昇順(S)		淡	明	犬	ボール	
3	2A		(Holic John John A Child's	↑			降順(O)		淡	明	雪	猫	
4	2A		(Holic John John A Child's	↕			色で並べ替え(I)		濃	明	紙	鳥	
5	2A		(Holic John John A Child's						淡	明	羊	凧	
6	2A		(Holic John John A Child's				"赤・青・黄・緑・茶・白・黒" からフィルターをクリア(C)		濃	明	花	女の子	
7	2A		(Holic John John A Child's				色フィルター(I)		濃	明	犬	お店	
8	2A		(Holic John John A Child's				テキスト フィルター(E)		濃	暗	湖	自転車	
9	2A		(Holic John John A Child's						濃	明	犬	たくさんの	
10	2A		(Holic John John A Child's				検索		淡	明	海	かもめ	
11	2A		(Holic John John A Child's				<input checked="" type="checkbox"/> (すべて選択)		濃	明	花	お店	
12	2A		(Holic John John A Child's				<input checked="" type="checkbox"/> 黄		濃	暗	ハロウィン	かぼちゃ	
13	2A		(Holic John John A Child's				<input checked="" type="checkbox"/> 黒		淡	暗	木	冬	
14	2A		(Holic John John A Child's				<input checked="" type="checkbox"/> 青		濃	暗	雪	ツリー	
15	4B		(Harc Marla Marla A Couple				<input checked="" type="checkbox"/> 赤		淡	明	座っている男の子		
16	4B		(Harc Marla Marla A Couple				<input checked="" type="checkbox"/> 茶		淡	明	家族	海	
17	4B		(Harc Marla Marla A Couple				<input checked="" type="checkbox"/> 白		淡	明	荷物	手を振る男	
18	4B		(Harc Marla Marla A Couple				<input checked="" type="checkbox"/> 緑		淡	明	少年	家族	
19	4B		(Harc Marla Marla A Couple				<input checked="" type="checkbox"/> (空白セル)		淡	明	車	山	
20	4B		(Harc Marla Marla A Couple						淡	明	地図	バラソル	
21	4B		(Harc Marla Marla A Couple						淡	明	テレビ	男の子	
22	4B		(Harc Marla Marla A Couple						淡	明	食事	テーブル	
23	4B		(Harc Marla Marla A Couple						淡	明	マット	少年たち	
24	4B		(Harc Marla Marla A Couple of Bi 10.00 But they weren't.						黒	濃	暗	環ころぶ	人形
25	4B		(Harc Marla Marla A Couple of Bi 11.00 Before they left for nature						黄	淡	明	冒険	少年たち

図1. 入力済み書誌データ

入力作業の過程で、「J - N列」に入力するべきだと考える内容が、初めに書誌情報を入力した学生（B列）とそれをチェックした学生（C列）の間で異なる場合は、両者で話し合っって入力情報を確定させるという作業を行った。この作業は、ストーリーのとらえ方によって最初に目に入るものが異なるという新鮮な驚きを受講生にもたらしたように見受けられた。自分がどのように「J - N列」に入力する情報を決めたのかを振り返り、自分なりの作品のとらえ方を話し合いの相手に説明することを通じて、書物と向かい合う際の切り口に多様性があるという気付きが得られたことは、「外書講読I」授業成果の一つであると考えられる。

このようにして受講生が作成した書誌データは学期末にクラス全員分まとめてデータベース化し「Campus (ドット・キャンパス)」を介して配布された(注3)。受講生はこのデータベースを利用し、各自で設定したテーマに沿った作品を検索し、作品の分析を行った。図1は、データベースの「J - L列」にフィルター機能をつけ、J列に入力されている色をすべて表示させたところである。この中から例えば「赤」のみにチェックを入れ、K列で「淡」、L列で「明」を選択すれば、パステルカラーのピンク色が目に入りやすいページだけを表示させることができる。このような書誌データの入力方法やその利用方法は、入力する項目を各学生の研究分野に合わせた情報に変えることにより、他の科目のレポートや卒業論文を執筆する際の文献整理にも応用可能であるということも合わせて指導し

た。「外書講読Ⅰ」では担当教員によって作成されたフォーマットに入力する作業を行ったが、将来的には受講生が自分の研究テーマに合わせたフォーマットを作成し分析を行う力を身に着けることが期待される。

本稿次章以降では、2013年度の「外書講読Ⅰ」受講生のうち、「色彩情報」という切り口で文献を利用した学生の研究内容を紹介する。他にも、作品中に見られる語彙表現やストーリー自体に注目し、作品について独自の視点から論じた優れたレポートが提出されたが、本稿では、英文解釈の訓練をするためではなく、英語学習以外の目的を持って複数の文献を整理した研究に焦点を当て、以下2人による研究を取り上げる。第2章では、夜空の色合いに興味を持った新田紗也が、夜空の色相と作品中のストーリー展開との関係についての仮説を検証する。次に第3章では中川勇生が、色の明度の違いが人に与える色彩的印象について論じる。なお、第2章は新田、第3章は中川が草稿をまとめたものについて本稿責任筆者が加筆補正を行った。

2 固定概念にとらわれない夜空の色合い

(新田 紗也)

2-1 研究の目的

「外書講読Ⅰ」では主に Caldecott 賞を受賞した児童向け作品を分析した。小さな子供はまず知識を吸収する為に読みやすい絵本やイラストだけで分かる絵本を読む。「外書講読Ⅰ」の授業で洋書絵本を読んでいて、子供向け作品では現実的な物事よりもどこか現実離れした物事が描かれることが多いと感じた。作品の色使いについても同様で、実際に目に映る色とは違った色合いで描写される場面が多く見られた。例えば、夜といえば真っ暗で何も見えないというのが多くの人々の抱く概念であると考えられるが、授業を通して手に取った作品では黒色ではなく青色・水色・紫色といった様々な色合いの夜空が登場していた。このようにバラエティに富んだ色の夜空が描写されていること背景には、夜という場面自体がストーリー展開によって異なった意味を持つということが一因となっていると考えられる。つまり、子供にとって怖い物として夜が捉えられている場面では恐怖感を表す暗い色相の夜空、朝がくるまでの待ち遠しい時間、子供の夢が実現する時間という意味を持つ夜では明るい色相の夜空というように、夜空の色が場面ごとの主人公の様子を映し出していると考えられた。このようにして、実際には黒色に見えるはずの夜空を様々な色合いで表現することにより、読者である子供を「夜空は黒」という固定概念から解放し、その時の感情により同じ色が何色にでも見えるという果てしない創造力の世界へ導くという役割を絵本が果たしていると考えられる。そこで本研究では以下3つの仮説を立て、夜空の色相と、その場面に現れる主人公の感情との関係について検証することにした。

- (1) 寒色系の夜空は子供をワクワクさせる場面に使われる傾向がある。
- (2) 中性色の夜空は悲しみを与える場面に使われる傾向がある。
- (3) 暖色系の夜空は楽しい場面に使われる傾向がある。

2-2 定義

まず、暖色系・寒色系について参考文献を用い定義する。色を見分けるには、色相・明度・彩度の3つの基準があるが、色相が人の心理に最も大きな影響力を持つとされている。色相とは、色の温かさ・寒さなどの印象の違いである。色相の違いによって、温かみを感じさせる暖色（赤やオレンジ色など）と、冷たさを感じさせる寒色（青や緑など）というグループに分けられる（注4）が、研究者によって、緑を寒色とするか中性色とするかについては意見が分かれるため、本研究では、色相環（図2）（注5）を参考に、赤やオレンジ色を暖色、青や青紫を寒色、緑や紫を中性色とする。また、複数の色を使用する色を混合色とし、夜空の色を分類する基準とする。

次にPlutchikの感情の輪（注6）を用い、各場面に現れる主人公の感情を定義する（図3）。濱・鈴木・濱による「Plutchikの感情の輪」の説明によると、ヒトの行動には8種類の行動の原型があり、それに対応する純粹感情がある（注7）。本研究では、感情を分類する基準として、図3に示す「Plutchikの感情の輪」の一番内側に示されている「喜び（ecstasy）・受容（admiration）・恐れ（terror）・驚き（amazement）・悲しみ（grief）・嫌悪（loathing）・怒り（rage）・予期（vigilance）」の8つの感情を用いる。

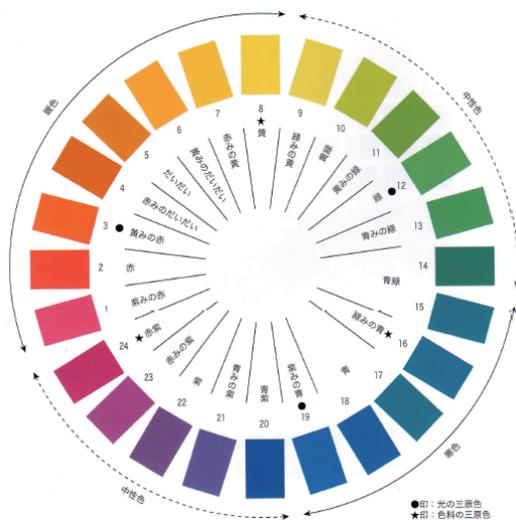


図2. PCCS 明度－色相
渡辺（2005: 4）より引用

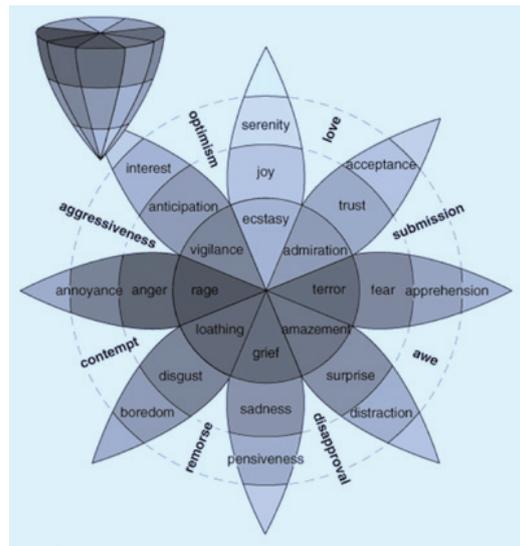


図3. Plutchikの感情の輪
Plutchik（2001: 349）より引用

2-3 方法

本学の有瀬図書館に所蔵されている児童向け洋書作品のうち、夜空が描写されている16作品を分析対象とした（注8）。

はじめに、ストーリーを読みながらページを開き最初に目に入る色（以下、着目色と呼ぶ）をページごとに入力した（全128場面）。入力する色の判断基準としては、各場面で広い面積を占める色を赤・青・黄・黒・白・緑・紫・茶から選ぶ、という方法をとった。本研究では夜の場面を対象に分析を行ったが、その場面中に子供や動物などの主人公が登場

する。登場人物が夜空よりも強調されている場合などは夜空の色以外がページを開いた時に最初に目に入る色となる。このように夜空だけでなく登場人物が強調されている時は強調に使用されている色を着目色として判断した。

次に、夜空の色を場面ごとに入力し（全99場面）千々岩（2006）に従い寒色・暖色・中性色・混合色に分類した（注9）。例えば、夜空の色が「青色・紺色・藍色・水色」であれば「寒色」, 「赤色・オレンジ色」であれば「暖色」, 「紫色・緑色」であれば「中性色」, 「水色とピンク色・紫色と黄色のように複数の色を使用している場合」であれば「混合色」とした。

最後に、物語中のキーワードを場面ごとに入力し、その時の主人公の感情を挿絵やストーリー展開から読み取り「Plutchikの感情の輪」に従い分類した。この際、図4上段左のように主人公が小躍りしている場面には「喜び」、上段右のように主人公が驚いて飛び上がる場面には「驚き」というように挿絵から推測できるものだけでなく、上段左から2番目「受容」、下段左「悲しみ」のように、ストーリー展開から読み取る必要があるものも存在した。また、「嫌悪」と「怒り」の感情については、今回分析対象とした作品の中には見られなかった。

以上の入力作業には「外書講読I」で使用した書誌情報フォーマットを応用し独自に作成したエクセルファイルを用いた。



図4. 感情の判別例

さらに、以上の情報を分析するために、着目色を円グラフにして比率を調べた。次に、各場面における主人公の感情と夜空の色合いの関係を表にまとめてみた。

2-4 分析結果

はじめに、分析対象とした16作品、全128場面の内、着目色の内訳を図5に示す。結果として、夜をテーマにしている洋書で最も使用されているのは青色（64%）であり、一般的に「夜」のイメージを伴う黒色は全体の5%の場面ではしか使われていないことが判明した。つまり、絵本作家は「夜=黒色」という固定概念から解放されて、ストーリー展開に合わせた色使いで夜の場면을演出していると考えられる。

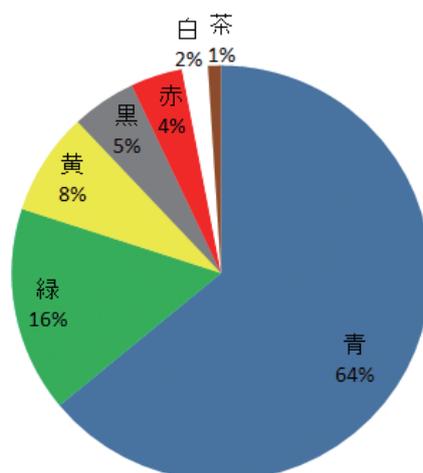


図5. 着目色の比較

次に、Plutchik (2001) による感情の輪の一番内側でコアとなる8つの感情についての色別集計結果を表1に示す。寒色系の夜空の場面では「喜び」(65場面中53場面)、中性色の夜空の場面では「悲しみ」(18場面中8場面)、暖色系の夜空の場面では「驚き」(2場面中2場面)が描かれる比率が高いことが分かった。

表1. 各夜空に関連する感情

	喜び	受容	恐れ	驚き	悲しみ	嫌悪	怒り	予期	計
寒色	53	2	3	5	2	0	0	0	65
中性色	7	0	0	0	8	0	0	3	18
暖色	0	0	0	2	0	0	0	0	2
混合色	13	1	0	0	0	0	0	0	14

2-5 考察

本研究では「夜」をテーマとする絵本を選択し分析した結果、着目色（ストーリーを読みながらページを開き最初に目に入る色）に黒色が使用されているケースは極めて少ないことが明らかとなった。このことから、夜の場面であえて他の色を引き立たせることで子供の想像力を縛らないようにしているのではないのかと考えられる。そして夜空の色合いと主人公の感情の関係については、かなり関連性があることが分析を通して見られた。以

下では、今回の分析結果を踏まえ、本研究で立てた3つの仮説について検証を行う。

- (1) 寒色系の夜空は子供をワクワクさせる場面に使われる傾向がある。
- (2) 中性色の夜空は悲しみを与える場面に使われる傾向がある。
- (3) 暖色系の夜空は楽しい場面に使われる傾向がある。

仮説(1)については、寒色系の色が使用される場面における主人公の感情を分析した結果、「喜び」が多い事が判明した(表1)ことから、支持された。つまり、寒色系夜空には読者をワクワクさせるような楽しい感情が多く見られた。例えば寒色系の青色には爽やか・気持ちよい・開放感・純粋という言葉が連想される(注10)ことから、読み手をリラックスさせ、且つワクワクしながらページを捲らせる効果があると考えられる。そこで敢えて黒色の概念のある夜空が寒色系の夜空で表現されていると考えられる。

仮説(2)については、中性色が使用される場面における主人公の感情を分析した結果、「悲しみ」が多かった(表1)ことから、支持された。例えば、実際に主人公が悲しむ場面に多く使われていた中性色の緑色には、安らぎ・癒し・穏やかという言葉が連想される。悲しい場面に緑色の夜空を使用することで、読者にその悲しみを優しく穏やかに受け止めさせる役割があると見られる。

最後の仮説(3)については、暖色系の赤が使用される場面における主人公の感情を分析した結果、「驚き」が多かった(表1)ことから、暖色系夜空=楽しいという仮説は棄却された。赤色は温かみを感じさせるだけでなく、危険・緊張・活動的という印象も伴うことが一因となっていると考えられる。

2-6 おわりに

今回の分析に使用した洋書絵本は Caldecott 賞を受賞した作品を中心にしており、主な対象は子供である。たとえば「夜は黒色」というような固定概念は幼少期に形成されるものであるが、本研究を進める内にそれが今までの外的要因から植え付けられた概念であると感じられた。幼少期の頃から沢山の絵本を読み聞かせ、多様な色の表現方法に触れさせることは、このような固定概念を植え付けずに子供の想像力を育てることに役立つと考えられる。

3 色の明度によるイメージの違い

(中川 勇生)

3-1 研究動機

私たちの日常生活において、色はファッションやインテリアなどに活用されさまざまなイメージを人に与えている(注11)。例えば、赤は情熱・黄は高貴・白は純粋・青は神秘的・緑は安らぎ・黒は恐怖という性質を持っている(注12)、(注13)、(注14)。また、日本では古くから明るい色はすべて「赤」と呼ばれていた(注15)ことが示すように、赤・黄などの暖色と明度の高い白は明るい場面にふさわしく、青・緑のような寒色と明度の低い黒は暗い場面にふさわしいと考えられる。このような色彩イメージの解釈を発展させて千々岩

(1984) は、現代の工業製品の色自体を現代における「流行色」と捉え、色の流行を動かす企業側の事情と購買者側の心理について考察している（注16）。

しかし、2013年度「外書講読Ⅰ」の授業の中で絵本を読む活動を通して、同じ赤でも明度の違いによって読者に与える印象が違うことに気づいた。例えば、同じ赤色の太陽であっても明度によって読者に与える印象が異なることがあった。そこで本研究では、色が人に与えるイメージが、明度の影響を受けるかどうかについて調べることにした。

3-2 方法

色の明度とそれが人に与えるイメージの関係を探るため、神戸学院大学有瀬図書館所蔵の洋書絵本122冊（2,982場面）を対象とし、2013年度前期「外書講読Ⅰ」の受講生29名が入力したデータを分析する。本研究で使用するデータは、以下の手順で入力されたものである。①対象となる各ページで最初に目に入った色を赤・青・黄・黒・白・緑・茶の中から1つ選ぶ。②選んだ色の明度が明るい暗いかを判別する。③入力したデータファイルを隣の席の受講生と交換し、入力情報について意見の相違がある場合は話し合って確定させる。ここで入力されたデータは受講生29名のそれぞれの感性に基づいているが、1人の受講生による判断ではなく、③の段階で確認作業を経ているため、信頼に値するデータといえる。なお、本研究では12色の色相環に含まれない「茶」を分析対象から外した。

3-3 結果

上記の方法で入力されたデータを集計した表2から、以下の3点が明らかとなった。

表2. 色ごとの明度による場面数

	赤	黄	白	青	緑	黒	計
明	189	243	245	165	176	90	1,927
暗	109	54	68	138	104	372	1,055
計	298	297	313	303	280	462	2,982

- (1) 全体的に明るいトーン（合計 $n = 1,927$ ）の方が暗いトーン（合計 $n = 1,055$ ）よりも多く出現している。
- (2) 本来明るいイメージを持つ暖色である赤・黄や、明度が高い白であっても、相当数が暗いトーンで使われている（赤 $n = 109$, 黄 $n = 54$, 白 $n = 68$ ）。
- (3) 本来暗いイメージを持つ寒色である青・緑や、明度が低い黒であっても、相当数が明るいトーンで使われている（青 $n = 165$, 緑 $n = 176$, 黒 $n = 90$ ）。

つまり、色がもともと持つ性質とは対なる色でも、明度が異なれば、その色と異なった側面のイメージを表現することができるということが明らかとなった。

3-4 考察

第1に、絵本のページを開いたときに最初に目に入る色として、明度が高いものの方が低いものよりも頻繁に出現するということの一因には、読者の絵本を読む意欲を掻き立てるという意図があると考えられる。また、明るい色を絵本全体に使用することで暗い色をより際立たせるという効果も考えられる。第2に、「明度の低い暖色」が、赤では赤色全体の1/3、黄では黄色全体の1/5も存在することについては、戦争や恐怖などマイナスイメージの場面で暗いトーンの暖色が使われていることが一因となっていると考えられる。第3の、「明度の高い寒色」が描かれるケースについては、青を例に挙げる。青の明度をあげると空に近い色になり、解放感が生まれる。さらに、明度の高低差がある青を組み合わせることで、海の深さや透明感が表現できる。このように、明度が異なる同系色を組み合わせることによって、寒色が明るいトーンで描かれるケースが生まれる。総じて、絵本作家は固定概念にとらわれずストーリーの流れに合ったトーンで、読者に興味を惹かせる技法を使用しているといえる。以下では、赤色と白色をとりあげ、色の一般的なイメージと作品中で使用されている色のトーンとのギャップに注目する。

まず、色の明度による赤色の使い方について述べる。赤という色は力・愛情など感情を高めるものとしてのイメージが強い(注17)。しかし、明度によって与えるイメージも変化する。明度が高くなれば、透明感や解放感を与え、「幸福・安心」のイメージを与える。また明度が低くなれば重く、葛藤・熟成などのイメージを与える(注18)。同じ色でも明度の高低によって人に与えるイメージが異なると考えられる。

次に、無彩色のうち明度が高い白色について述べる。白は明るい色・黒は暗い色という私たちが持つ固定概念と異なり、本研究の分析結果によると、白色も暗いイメージを伴うケースがある。白のカラーイメージとしては、「高貴・清潔・純粹」などきれいなイメージがあるが、白はきれいな性質だけを持っているわけではない(注19)。実際、白が使われている場面のうち2割強の場面では、白が暗いトーンで使われていた。白にも様々な種類が存在している。灰白色・赤白椽・月白・白藍・白群など、和名では20種類ほどある(注20)。その中でも藍白と白藍は、漢字こそ逆になっただけだが、色は全く異なっている。

3-5 おわりに

今回この研究を通して①色の種類の多さ、②明度が異なる色が持つ様々な表情が明らかになった。このような色の明度による表情の違いは、千々岩(1984)も述べている通り、商品開発をする際に購買者を惹きつける色彩を工夫するという技術に応用できる(注21)。また、私たち大学生は日々色と深い関係を持ちながら生活している。髪の毛を染める染料、ファッションやインテリアに個性を出すために色の相性・組み合わせを考える(注22)。色の明度の違いは私たちが明るい気分したり、悲しい気分になったり、私たちが飾ってくれたり大きな役割を果たしている。色の明度は、人の固定概念とは異なった、無意識下での感情を左右する可能性があると考えられる。

4 今後の展望と課題

本稿では、「外書講読」の受講生が書誌リストの作成法とデータの分析法に関する実習から学んだスキルを利用して行った色彩に関する研究内容を紹介した。第2章では新田紗也が、「暖色・寒色・中性色・混合色」の持つイメージについて検証し、第3章では中川勇生が、同じ色相であっても「色の明暗」によって人に与えるイメージが異なるということについて論じた。

この二人による研究は、色の三要素である「色相・明度・彩度」のうちの二つをカバーするという点で共通点があったが、他にも、興味深い研究内容に取り組む受講生が見られた。例えば、授業内で手に取った作品を読むうちに、日本語では「アシカ・アザラシ・オットセイ」と複数の名前で認識されている動物が英語ではまとめて“seal”と呼ばれるのに対して、日本語で「サギ」と呼ばれる鳥が英語では“heron”と“egret”という別の鳥として認識されていることに興味を持ち、文化と言語のつながりについて現在も調べている受講生がいる。言語圏の文化や気候の違いによる語彙の多様性の違いについては、すでに社会言語学の分野で多くの先行研究が見られるが、言語学の講義を受けて知り得た情報ではなく自分の力で「発見」したことがらについては自発的に調べる意欲が湧くようで、この受講生は「外書講読」の成績評価に換算される文献であるかどうかに関わらず、複数の関連書誌を読み進めつつ語例を現在も集めている。つまり、当初はクラスで作成したデータベースを使用し、「動物」のキーワードを含む作品を分析していたが、それだけでは飽き足らず、言語と文化に関する文献などを自発的に読み進め、「ブックトーク(注23)」の機会を利用して他の受講生に研究の進み具合を発表している。このように、「洋書を読む」という行為を単なる英文和訳の訓練とはせず、多様な分野に応用させて分析を進める意欲を持った受講生に恵まれたことは非常に喜ばしいことである。「外書講読」を通して身に着けた、自分なりの視点で文献を読み解く姿勢を、授業終了後も持ち続けてもらいたい。

一方で、「外書講読」では多くの書物を読まざるを得ない授業形態をとったため、受験勉強の名残からか懸命に1文1文の英文解釈をしようとする受講生にとっては、苦痛そのものであったと考えられる。このような英文解釈の仕方は将来翻訳家を目指すなど英語という言語の専門家になるのであれば必要な方法であるが、大半の経営学部生にとっては、英文であれ和文であれ書物は情報を得るための手段であるはずだ。和訳をただで理解できた気分になったり、書かれていることをそのまま鵜呑みにしたりするのではなく、書物が持つ本来の意味を受講生が認識し、自分なりのクリティカルな姿勢を保ちながら文献を吟味する力を今後の授業を通してさらに養いたい。

注

- [1] 中西のりこ・城戸章仁. (2014). 「図書館間における日本十進分類法の適用の不一致について」『神戸学院大学教育開発センタージャーナル』第5号, 1-13.
- [2] 実際のデータファイルには学生の番号と氏名が入力されたが、個人情報であるため、本稿図1では網掛けを施した。
- [3] 中西のりこ・久米希美. (2014). 「知的好奇心を満たすための読書」『神戸学院大学教育開発センタージャーナル』第5号, 83-94.

- [4] 芳原信. (2011). 『色彩の教科書：「色」のチカラと不思議』. 東京. 洋泉社. 39-75.
- [5] 渡辺安人. (2005). 『色彩学の実践』. 京都. 学芸出版社. 4.
- [6] Plutchik, R. (2001). The Nature of Emotions Human emotions have deep evolutionary roots. a fact that may explain their complexity and provide tools for clinical practice. *American Scientist*. 89(4). 344-350.
- [7] 濱治世・鈴木直人・濱保久. (2005). 『感情心理学への招待：感情・情緒へのアプローチ』. 東京. サイエンス社.
- [8] 本研究第2章で分析対象とした児童向け洋書は以下の16作品である。
 Munsch, R. (1986). *50 Below Zero*. Toronto: Annick.
 Eubank, P. R. (2003). *ABCs of Halloween*. Tenn: Ideals.
 Hutchins, P. (2007). *Barn Dance!* NY: Greenwillow.
 Galbraith, K. O. (2008). *Boo, Bunny*. Florida: Harcourt.
 Waddell, M. (2008). *Can't You Sleep. Little Bear?* London: Walker.
 Fleischman, S. (1986). *The Whipping Boy*. 1st ed. NY: Greenwillow.
 Taback, S. (2007). *I miss You Every Day*. NY: Viking.
 Tillman, N. (2005). *On the Night You Were Born*. NY: Feiwel & Friends.
 Yolen, J. (1987). *Owl Moon*. NY: Philomel.
 Udry, J. M. (1979). *The Moon Jumpers*. London: Bodley Head.
 Grimm, T. B. (2010). *The Star Child*. NY: NorthSouth.
 Wiesner, D. (1991). *Tuesday*. NY: Clarion.
 Murphy, J. (2007). *Whatever Next!* Rev. ed. London: Macmillan.
 Munsch, R. (1985). *Mortimer*. Toronto: Annick.
 McGhee, A. (2009). *Only a Witch Can Fly*. NY: Feiwel and Friends.
 White, R. (2012). *Belle Prater's Boy*. 1st Square Fish ed. NY: Square Fish.
- [9] 千々岩英彰. (2006). 『色彩学概論説』. 東京. 東京大学出版会. 16.
- [10] 芳原信. (2011). 前掲. 39-75.
- [11] 山脇恵子. (2009). 『図解雑学：よくわかる色彩心理』. 東京. ナツメ社.
- [12] 神庭信幸・小林忠雄・村上隆・吉田憲司. (1999). 『色彩から歴史を読む：モノに潜む表現・技術・認識』. 東京. ダイヤモンド社.
- [13] 山脇恵子. (2010). 『色彩心理のすべてがわかる本』. 東京. ナツメ社.
- [14] 芳原信. (2011). 前掲. 39-75.
- [15] 岩崎純一. (2009). 『音に色が見える世界』. P H P 研究所. 111.
- [16] 千々岩英彰. (1984). 『色を心で視る』. 福村出版.
- [17] 山脇恵子. (2009). 前掲.
- [18] 岩本知里. (2006). 『はじめて読む色彩心理学』. 秀和システム.
- [19] 山脇恵子. (2009). 前掲.
- [20] 渡辺安人. (2005). 前掲.
- [21] 千々岩英彰. (1984). 前掲.
- [22] 末永蒼生. (1998). 『自分を活かす色, 癒す色』. 東洋経済新報社.
- [23] 中西のりこ・久米希美. (2014). 「知的好奇心を満たすための読書」『神戸学院大学教育開発センタージャーナル』第5号, 83-94.